



菅波 茂

昨年12月26日。イラン南部のバムを中心として大地震が発生。バムとその周辺の人口12万人中の4万人が死亡。国内はイラクへの自衛隊派遣について議論沸騰していた。まさにその隣国での大惨事だった。

翌日の27日午前9時、AMDA本部から3人の医療チームの派遣を決定した。調整員は佐伯美苗氏。彼女はAMDAきっての中近東専門家である。アラビア語が話せる。そして、ペルシャ語も少々。細村幹夫医師はアフガニスタンやパレスチナでの診療経験があった。古村由香看護師は99年のトルコ大地震AMDA救援活動参加経験があった。28日に関西空港を出発して、29日にテヘラン空港に到着。イラン内務省と打ち合わせをした後、31日より現地で医療活動を開始した。

イランの姉妹団体から女性

医師1人が参加。貴重な現地パートナーになった。一方パキスタンのクエッタでアフガン難民救援医療活動を指導していた小西司緊急救援事業部長が27日に出発。28日にはイランに入国して被災地の中心のバムに到着。地震発生72時間以内には調査活動を開始した。

12月27日。インドネシア支部長であるタンラ教授より本部に電話がかかった。「イラ

イラン大地震救援活動

ン大地震被災者救援活動に本部から医療チームを派遣するの。インドネシア支部から医療チーム派遣の用意がある。どうするのか」と。30日にはネパール支部からメンバーが入った。「ネパール支部は本部派遣の医療チームに参加の用意がある。本部はどうするのか」と。

結果としてインドネシア医療チーム3人は、12月30日から2月4日までバムから60#

離れた地域で医療活動を実施した。ネパール支部はイランのビザをインドのニューデリーで発給してもらうのに3日間もかかるため、待機のままで終わった。ネパール支部が寒さで凍えているイランの被災者のために、豊かでないネパールの人たちから寄付された衣料を集めていた事実は報告しておきたい。

年末、正月を返上して救援活動を支えた本部職員の「命

への衝動」は本物だと思った。いずれにしろ、中近東や中央アジアにおけるAMDA多国籍医師団による本格的な人道支援活動の到来を予感する。

公設国際貢献献体と駐日イラン大使館との日ごころの信頼関係が浮上した。岡山空港にある備蓄センターに保管されていた毛布1000枚などの救援物資がイラン航空によって無料で空輸された後、イ

ラン赤新月社によって被災者に配布された。イラン大使館から石井正弘知事に感謝状が贈られた。石井知事の英断と県民の皆さまのご支援に感謝申し上げたい。

AMDAは昨年3月の米軍のイラク攻撃による難民流出に備えて、イラン南部に救援チームを待機させていた。その時の人脈と経験が今回の大地震被災者救援活動に大いに役立った。イラク復興に日本は、どのように貢献できるのか。昨年6月にAMDAがイラクに派遣した調査チームは、イラク南部の都市バスラ付近での人道支援活動を提示している。イランもイラク南部も同じイスラム教のシリア派が多数を占める。今回のイラン大地震被災者支援活動は、来たるイラク南部におけるAMDAの人道支援活動への確実な補助線のような気がする。幻想だろうか。いずれにしても皆さまの暖かいご支援をお願いしたい。

アジア医師連絡協議会代表

題字は筆者